

本州で初めて確認されたクロフサスグリ(Ribes nigrum)の害虫スグリコスカシバSynanthedon tipuliformis(Sesiidae)

誌名	北日本病害虫研究会報
ISSN	0368623X
著者名	村井,智子 成田,治 雪田,金助
発行元	北日本病害虫研究会
巻/号	61号
掲載ページ	p. 243-246
発行年月	2010年12月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



本州で初めて確認されたクロフサスグリ (*Ribes nigrum*) の 害虫スグリコスカシバ *Synanthedon tipuliformis* (Sesiidae)

村井智子*・成田 治**・雪田金助*

The First Occurrence of Currant Clearwing Moth,
Synanthedon tipuliformis (Sesiidae) in Honshu Island, Japan

Tomoko MURAI*, Osamu NARITA** and Kinsuke YUKITA*

2008年に青森県八戸市南郷区のクロフサスグリ園地において、北海道に次いで2例目、本州では初めてとなるスグリコスカシバ (*Synanthedon tipuliformis*) の発生と枝幹部における被害が確認された。2009年には八戸市南郷区のほか、青森市高田と三戸郡五戸町のクロフサスグリ園で本種の発生が認められた。

Key words: bluckcurrant, *Ribes nigrum*, Currant clearwing moth, *Synanthedon tipuliformis*, Honshuu Island

青森県では主に青森市で、30年ほど前からクロフサスグリ (*Ribes nigrum*) が栽培されており、2007年には栽培面積が3.4ha、生産量が国内生産量の90%以上を占める主産地となっている。最近では果実や葉の機能性が着目され、青森市以外の市町村でも栽培されるようになってきた。

このような状況のなかで、2008年に八戸市南郷区でクロフサスグリ の幹や枝をせん孔加害する未知の害虫被害が発生した。被害枝は園内に広くみられ、折れやすく、さらに葉や果実も小さくなる傾向がみられた。被害枝に潜伏する幼虫を同定したところ、北海道に次いで2例目、本州では初めてとなるスグリコスカシバ (*Synanthedon tipuliformis*) であることが確認されたので、その経緯と2009年までの本種の分布地域を報告する。

本種の同定は名城大学教授有田豊博士に依頼した。ここに深く感謝申し上げる。

材料および方法

1. 初確認

2008年5月2日に青森県八戸市南郷区中野のクロフサスグリ (品種不明) において、枝幹がせん孔加害された枝が発生した。同園は2006年秋に岩手県からクロフサスグリ (品種不明) 苗 (樹齢不明) 60本を移植した園地 (面積: 約2a) である。被害枝を分解しながら被害状況を

調査し、被害枝に潜む幼虫を25℃、15L9Dの条件下で羽化させた。

2. 種の同定

2008年5月22日に八戸市南郷区中野のクロフサスグリから幼虫あるいは蛹が潜むとみられる被害枝を採取し、名城大学教授有田豊博士に加害種の同定を依頼した。

3. 被害状況

2008年5月22日に、八戸市南郷区中野のクロフサスグリ園において、被害状況の遠観調査を行った。2009年の5月から8月まで八戸市南郷区中野および青森市高田のクロフサスグリ園とクロフサスグリが植栽されている五戸町扇田のりんご研究所県南果樹部において成虫の発生および被害状況を観察した。なお、2009年10月14日に青森市高田の園地において連続するクロフサスグリ65株を対象に虫糞や脱出口の有無で被害枝を判定し、被害株率を求めた。

第1表 青森市高田におけるクロフサスグリのスグリコスカシバによる被害状況 (2009年)

調査株数(株)	被害株率(%)	原因不明枯死株率(%)
65	79.9	9.2

注) 調査園地面積: 20a

*青森県産業技術研究センター りんご研究所 Apple Research Institute, Kennan Fruit Tree Section, Aomori Prefectural Industrial Technology Research Center, 2 Nagashita, Ohgida Gonohe, Aomori 031-1527 Japan

**現在: 青森県営農大校

結 果

1. 持ち込まれた被害枝の特徴

枝の内部は髓部が空洞化し、暗褐色のおがくず状のもので満たされていた。その中に体長約10mm、体色が乳白色で、頭部が赤褐色の幼虫が認められた(第1図)。

被害枝から採取した幼虫2頭を、25℃、15L9Dで処理した結果、18日後に1頭が羽化した(第2図)。羽化個体は体長約10mmであった。

2. 種の同定

名城大学教授有田豊博士によりスカシバガ科、スグリコスカシバ *Synanthedon tipuliformis* (Sesiidae) と同定された。

3. 被害状況

2008年5月22日、八戸市南郷区中野における調査では、不発芽枝(第3図)や葉が萎凋している枝がみられた。これらの枝には直径約1.5mmの脱出口(第4図)が認められた。

2009年の八戸市南郷区中野における調査では5月27日に前年同様、不発芽枝が認められた。6月25日には枝先の葉が萎凋している枝も認められ、飛翔雄が捕獲された。8月12日には葉枯れした枝(第5図)に虫糞の排出がみられた。

青森市高田(樹齢30年生以上)では同年6月9日の調査において枝に羽化殻の付着(第6図)や虫糞(第7図)が排出された枝が多数観察され、枝はもろく、触れると折損するものがあった。本園ではスグリコスカシバの雌雄成虫が、6月と7月に園地内で確認された。6月は頻繁に飛翔し、また、葉上に留まる成虫(第8図、第9図)が多数確認されたが、7月中旬以降はほとんど確認されなかった。

10月14日の被害株率は73.9%であった。

同年随時調査を行った五戸町扇田(樹齢3年生ほか)では6月11日と26日に成虫の飛翔が確認された。



第1図 クロフサスグリ被害枝と寄生幼虫



第3図 クロフサスグリの不発芽枝



第2図 被害枝由来の成虫及び羽化殻



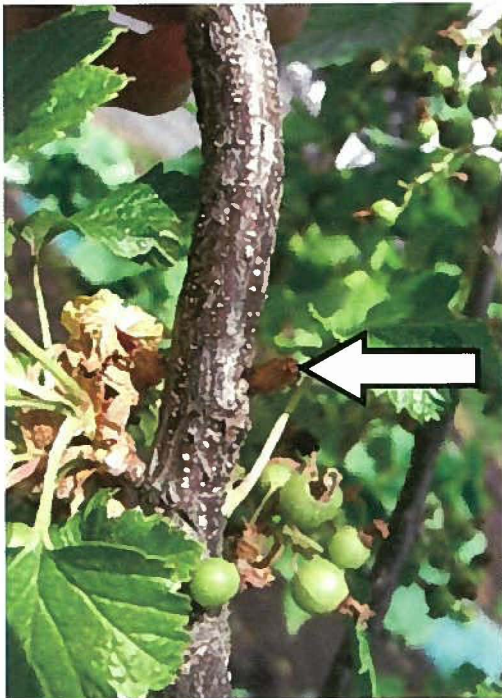
第4図 寄生虫の脱出口(矢印)



第5図 葉枯れが発生したクロフサスグリの被害枝



第7図 被害枝に綴られた虫糞（矢印）



第6図 羽化殻（矢印）



第8図 スグリコスカシバ雌成虫



第9図 スグリコスカシバ雄成虫

考 察

2008年5月に八戸市南郷区中野のクロフサスグリに発生した枝枯れ（不発芽枝）や葉の萎凋症状はスグリコスカシバに起因することが明らかになった。本被害の発生時期、不発芽および枝の髄部の空洞化などの症状はこれまで報告されたスグリコスカシバの被害症状と一致していた（1）。

本種はこれまで北海道で発生が報告（1）されており、青森県における発生は本州で初めて、国内では2例目である。

青森県での発生経緯は不明であるが、2009年の調査において、青森市、八戸市および三戸郡五戸町など栽培歴の長短にかかわらず発生が確認されたことから、県内に広く生息している可能性が示唆された。

本種の成虫は6月上旬から確認され、7月中～下旬にはほとんど認められなかった。また、スグリコスカシバの被害は本県では、クロフサスグリのみで確認されたが、他のスグリ科植物への寄生については不明である。したがって、防除時期を特定するため、今後はこれら生態の解明が必要と考えられた。それとともに、被害園地では枝枯れや葉の萎凋、枝の折損が広く認められており、これらの症状がクロフサスグリの生産にどのような影響をおよぼすか、解析する必要がある。

引用文献

- 1) 岩崎・有田(2008)北海道からのフサスグリの外来種スカシバガ(スカシバガ科)の発見. 蝶と蛾, 59(1): 45-48.